



第36回 日本・ASEAN 経営者会議

「10年後の東アジア経済連携・統合と日 ASEAN 関係のあり方」

2010年10月6日～8日

公益社団法人 経済同友会

目次

第 36 回 日本・ASEAN 経営者会議 プログラム.....	2
第 36 回 日本・ASEAN 経営者会議 参加者リスト.....	4
第 36 回 日本・ASEAN 経営者会議 概要（日本語仮訳）.....	10
第 36 回 日本・ASEAN 経営者会議 共同声明（日本語仮訳）.....	18

第36回 日本・ASEAN 経営者会議 プログラム

1. メイン・テーマ

「10年後の東アジア経済連携・統合と日ASEAN関係のあり方」

2. 開催概要

日時: 10月6日(水)～10月8日(金)

会場: 椿山荘(東京都文京区関口2-10-8 TEL:03-3943-1111)

1日目:10月6日(水) 15:00 - 20:30

AJBM 推進委員会議

15:00 - 17:30

15:00 - 16:30

(1階 ペガサス)

推進委員会

17:00 - 17:30

(1階 カシオペア)

セッション担当者による事前打ち合わせ

夕食会

18:30 - 20:30

(8階 コスモス)

<参加対象者>

ASEAN:会議参加者

経済同友会:正副代表幹事、アジア委員会正副委員長

2日目:10月7日(木) 9:00 - 20:30

開会式

9:00-10:00(60分)

(4階 ジュピター)

萩原敏孝 第36回 AJBM 議長開会挨拶

(経済同友会 副代表幹事・アジア委員会委員長)

桜井正光 経済同友会代表幹事挨拶

モー・ジョー 第36回日本・ASEAN 経営者会議共同議長挨拶

(ミャンマー代表、ミャンマー・マーケティング・

リサーチ&デベロップメント マネージング・ディレクター)

総理挨拶代読:菊田真紀子 外務政務官

基調講演:池田元久 経済産業副大臣

来賓挨拶:フラ・ミン東京 ASEAN 委員会議長・駐日ミャンマー大使

第1セッション

10:30-12:00(90分)

(4階 ジュピター)

テーマ:「東アジア経済連携・統合のあるべき姿」

議長: シャザリ・スレイマン (KPMG パートナー、ブルネイ)

パネリスト:

アンワル・プルカダン (トリピンド・パトリア社長、インドネシア)

門脇英晴 (日本総合研究所 特別顧問)

リタ・キング (バタフライ ディレクター、シンガポール)

グエン・ヴェト・クオン(サイゴン・インベストメント・グループ日本代表、ベトナム)

<p>昼食会 12:30-14:00(90分) (1階 ギャラクシー)</p>	<p>ゲスト・スピーカー： モンテ・カセム (立命館大学 副総長、立命館アジア太平洋大学 前学長)</p>
<p>第2セッション 14:30-16:00(90分) (4階 ジュピター)</p>	<p>テーマ： 「日 ASEAN 間の連携強化と日本 ASEAN 経済連携協定の深化」 議長：プー・サエ・トン(アンコ・ブラザーズ、カンボジア)</p> <p>パネリスト： 山口千秋 (アジア委員会副委員長、トヨタ自動車 常勤監査役) トーマス・アキノ (リサーチ・コミュニケーション・センター シニア・フェロー、フィリピン) イグナチウス・ホワン (ブライアン・ケーヴ・LLP パートナー、シンガポール) ブンルアサック・プッサルングスリ (CIMB タイ・バンク調査部 社長、タイ)</p>
<p>第3セッション 16:30-18:00(90分) (4階 ジュピター)</p>	<p>テーマ：「アジア発イノベーションの促進」 議長：モー・ジョー (ミャンマー・マーケティング・リサーチ&デベロップメント マネージング・ディレクター、ミャンマー)</p> <p>パネリスト： クスモ・マルトレジヨ (キャッセル・ヤサ会長、インドネシア) 菅田史朗 (アジア委員会副委員長、ウシオ電機 社長) ウデト・ソウバナボン (ラオス商工会議所副会頭、ラオス)</p>
<p>経済同友会主催夕食会 18:50-20:30(100分) (1階 ギャラクシー)</p>	<p>来賓挨拶：佐々江賢一郎 外務事務次官 来賓： 駐日 ASEAN 各国大使</p>

3日目：10月8日(金) 8:00 - 10:45

<p>推進委員会 8:00 - 9:30 (1階 ペガサス)</p>	<p>軽食、全体総括、会議要約、共同声明採択、各国代表挨拶</p>
<p>閉会式 10:00 - 10:45 (4階 ジュピター)</p>	<p>共同声明採択 桜井正光 経済同友会代表幹事 挨拶 モー・ジョー 第36回日本・ASEAN 経営者会議共同議長挨拶 (ミャンマー代表、ミャンマー・マーケティング・ リサーチ&デベロップメント マネージング・ディレクター) 萩原敏孝 第36回 AJBM 議長 閉会挨拶 (経済同友会 副代表幹事・アジア委員会委員長)</p>

第36回 日本・ASEAN 経営者会議 参加者リスト

(敬称略)

日本側

正副代表幹事

- | | |
|---------|---|
| 桜井 正 光 | 経済同友会 代表幹事
リコー 取締役会長執行役員 |
| 長谷川 閑 史 | 武田薬品工業 取締役社長
経済同友会 副代表幹事 |
| 萩原 敏 孝 | 第36回日本ASEAN経営者会議議長
経済同友会 副代表幹事
アジア委員会 委員長
小松製作所 相談役・特別顧問 |
| 勝 俣 宣 夫 | 経済同友会 副代表幹事
アジア委員会 委員長代理
丸紅 取締役会長 |
| 高 須 武 男 | 経済同友会 副代表幹事
バンダイナムコホールディングス 取締役会長 |
| 長 島 徹 | 経済同友会 副代表幹事
帝人 取締役会長 |
| 前 原 金 一 | 経済同友会 副代表幹事・専務理事 |

岡山経済同友会

- | | |
|---------|-----------------------------------|
| 中 島 基 善 | 岡山経済同友会 代表幹事
ナカシマホールディングス取締役社長 |
| 萩原 邦 章 | 岡山経済同友会 常任幹事
萩原工業 代表取締役社長 |
| 金 森 満 廣 | 岡山経済同友会 事務局長 |

アジア委員会副委員長

- | | |
|---------|--------------------------------|
| 上 原 治 也 | アジア委員会 副委員長
三菱UFJ信託銀行 取締役会長 |
|---------|--------------------------------|

佐藤 龍雄	アジア委員会 副委員長 東日本高速道路 取締役会長兼社長
菅田 史朗	アジア委員会 副委員長 ウシオ電機 取締役社長
関 誠夫	アジア委員会 副委員長 千代田化工建設 相談役
山口 千秋	アジア委員会 副委員長 トヨタ自動車 常勤監査役

経済同友会会員他

飯村 慎一	(光陽電気工事 取締役社長)
糸魚川 順	(立教学院 理事長)
井口 武雄	(三井住友海上火災保険 シニアアドバイザー)
岩崎 俊博	(野村信託銀行 執行役社長)
上西 京一郎	(オリエンタルランド 取締役社長兼 COO)
大石 勝郎	(太陽生命保険 取締役会長)
小笠原 範之	(日興コーディアル証券 取締役副社長)
尾崎 陽二	(日本生産性本部 国際協力部長)
小野 俊彦	(日新製鋼 相談役)
門脇 英晴	(日本総合研究所 特別顧問)
河合 豊	(フライングフィッシュサービス 取締役社長)
河原 茂晴	(あずさ監査法人 (KPMG Japan) グローバルマーケット統括パートナー)
神崎 泰雄	(日興コーディアル証券 顧問)
小出 寛治	(NTTファイナンス 相談役)
河野 栄子	(DIC 社外取締役)
近藤 正一	(アール・アイ・エー 名誉会長)
瀬山 昌宏	(インターエックス 取締役社長)
橘・フクシマ・咲江	(G&S Global Advisors Inc. 取締役社長)
谷口 恒明	(日本生産性本部 理事長)
竹馬 晃	(横浜倉庫 専務取締役)
筒井 博	(日新 取締役会長)
手納 美枝	(アカシアジャパン・デルタポイント 代表取締役)
富坂 良雄	(日本能率協会 最高顧問)
中島 洋	(グリーンハウス 執行役員)
野田 馨	(サンワコムシスエンジニアリング 取締役相談役)
濱口 敏行	(ヒゲタ醤油 取締役社長)
林 明夫	(開倫塾 取締役社長)
森 哲也	(日栄国際特許事務所 代表社員・所長・弁理士)
森本 昌憲	(藤田観光 取締役会長)
安田 育生	(ピナクル株式会社 取締役会長 & CEO)
伊藤 清彦	(経済同友会 常務理事)

オブザーバー

安久 淳哉 (小松製作所 経営企画室 主査)
上野 進 (小松製作所 建機マーケティング本部 海外営業本部
アジア・大洋州グループ営業部長)
金子 哲也 (丸紅 秘書部 部長付)
坂井 広志 (池袋松屋 部長)
重本 正志 (味の素 秘書室専任課長)
寺澤 裕子 (トヨタ自動車 海外渉外部 グループ主幹)
寺田 哲也 (日本通運 海外企画部 選任部長)
早坂 淳吾 (ウシオ電機株式会社 総合企画室 調査役)
森本 康宏 (丸紅 市場業務部 部長代理)

以上 54 名

ASEAN 側

ブルネイ

Mr. Shazali bin Sulaiman, Partner, KPMG

カンボジア

Mr. Phu Sae Tong President/CEO, Anco Brothers Co., Ltd

Ms. Prum Sophallika, Secretary to Managing Director, Khmer Electrical Power Co., Ltd

インドネシア

Mr. Kusumo Martoredjo, Chairman, PT. Catur Yasa

Mr. Vincent Chen

Mr. Anwar Pulukadang, President, PT. Tripind Patria

Mr. Hari Sigit

Mr. Irwan Syarkawi, President Commissary, Bakrie Brothers

Mr. Burhan Uray

ラオス

Mr. Oudet Souvannavong, Vice President, Lao National Chamber of Commerce and Industry

マレーシア

Mr. Dato ' Md Taib Abdul Hamid, Vice President/Chairman, "Malaysia-Japan Economic Association (MAJECA), See Hoy Chan Agencies Sdn Bhd"

Mr. Hj Rasol Abu Bakar, Directorj, JETRO Malaysia

Ms. Prasanna Rani Bandi, Nutritionist, Go Natural Organic Products Sdn Bhd

Dr. Ramaiah Bandi, Technical Director, Go Natural Organic Products Sdn Bhd

Mr. Yeonhang Chuah, Managing Director, InterAsia Links Co. Ltd. (based in Japan)

Ms. Ng Su Fun, Executive Secretary, Malaysia-Japan Economic Association (MAJECA)

Mr. Jonathan David Horsley, Director, Export Marketing, I-Green (M) Sdn Bhd

Ms. Florence Khoo Lai Peng, Asst. Executive Secretary, Malaysia-Japan Economic Association (MAJECA)

Ms. Hee Hwee Leng, Manager, International Marketing, Avialite Sdn Bhd

Ms. Mithaliah Rozahan, Assistant Director, JETRO Malaysia

Ms. Jessica Ng Su Tzin, Chief Operations Officer, I-Green (M) Sdn Bhd

ミャンマー

Mr. Moe Kyaw, Managing Director, Myanmar Marketing Research & Development Co., Ltd

Mr. Tun Win Han, General Manager, Zaykabar Co., Ltd

Mr. Nyan Thit Hlaing, Executive Director, Proven Technology Industries Co. Ltd. (Toyo Battery)

Mr. Sein Phyo Hlaing, General Manager, Mahar Nandar Co., Ltd
Mr. Ye Htut Chairman, Shin Ye Htut Group of Companies
Mr. Thet Oo Director, Original Group Company Ltd
Mr. Zay Thiha, Vice Chairman, Zaykabar Groups of Company Ltd
Mr. U Myint Wai

フィリピン

Mr. Cesar E.A. Virata, Board of Directors, Rizal Commercial Banking Corporation
Mr. Tomas I. Alcantara, Chairman & President, Alsons Consolidated Resources, Inc.
Mr. Thomas G. Aquino, Senior Fellow, Center for Research and Communication
Ms. Leonora C. Collantes, General Manager, Supercare Medical Supplies
Mr. Miguel P. Guerrero, Consul General, Consulate General of Jamaica
Mr. Naomichi Hokari, President, KP-Tec
Mr. Bun Chin Hwang, Chairman and President, Trans World Trading Co., Inc.
Mr. Eric Paul Hwang, Member of the Board, Trans World Trading Co., Inc.
Mr. Enrico M. Ingles, Managing Partner, Law Firm of Ingles, Laurel Calderon
Mr. Egmidio Cesar Jose, President, Sanoh Fultoh (Phils.), Inc.
Mr. Hiroo Katsuta, Senior Project General Manager, Toyota Tsusho Corporation
Mr. Benjamin C. Laurel, YKK Philippines, Inc.
Mr. Francis Laurel, President and CEO, YKK Philippines, Inc
Mr. Reginaldo A. Oben, Chairman/President, Toyota Balintawak Group
Mr. Gerard Sanvictores, Partner and Head of Administration, Sycip Gorres Velayo & Co.
Mr. JJ Samuel A. Soriano, Chairman, In-Store Digital Display International
Mr. Eusebio Tan, Managing Partner, Angara Abello Concepcion Law Office
Mr. Tanya, Alfonso C., General Manager, Allenor Marketing
Mr. Philip Tuazon, President, Dolomite Mining Corporation
Mr. Robert Y. Ynson, President, Phesco, Inc.
Mr. Francisco D. Varua, Vice President for Agriculture, Philippine Sugar Millers Association

シンガポール

Mr. Cecil Leong, CEO, Bryan Cave International Trade Pte Ltd.
Mr. Ignatius Hwang, Office Managing Partner, Bryan Cave LLP Singapore
Mr. Tatsuya Kanemitsu, Senior Manager, Bryan Cave International Trade K.K. (Japan)
Ms. Rita King, Director, Barterfli Holdings Singapore
Mr. Damien Lam, Managing Director, LeadingSide Pte Ltd
Mr. Patrick Tang, Chairman, Plarssleslar

タイ

Mr. Supong Chayutsahakij, Vice Chairman, Bankgkok Expressway Public Co., Ltd.
Mr. Bunluasak Pussarungsri, Executive President, Research Office, BankThai and CIMB Thai Bank Public Company Limited"

ベトナム

Mr. Nguyen Viet Cuong, Director, Saigon Investment Group Japan
Ms. Vo Thi Xuan Hanh, General Director, Ninh Phuoc Eco Tourist Company
Mr. Dinh Quang Hien, General Director, Saigontourist Transport Company
Mr. Cao Van Quang, General Manager, Saigon Kim Lien Hotel
Mr. Nguyen Tuan Quang, Assistant General Director, Saigontourist Holding Company
Mr. Tran Huy Thang, Director of Sales and Marketing, Saigontourist Holding Company
Mr. Dinh Quang Phuoc Thanh, Foreign Office Representative, Saigontourist Transport Company
Mr. Do Phu Tho, General Manager, Saigon Morin Hotel
Mr. Nguyen Duc Thong, General Manager, Kim Do Hotel
Mr. Vuong Anh Tuan, General Manager, Continental Hotel
Mr. Đ ang Thanh Tung, General Manager, Saigon Tourane Hotel
Mr. Duong Hong Viet, General Manager, Grand Hotel
Mr. Nguyen Anh Vu, General Manager, Majestic Hotel

以上 71 名

第 36 回 日本・ASEAN 経営者会議 概要 (日本語仮訳)

メイン・テーマ:「10 年後の東アジア経済連携・統合と日 ASEAN 関係のあり方」

会議概要

第 36 回 日本・ASEAN 経営者会議が 10 月 6 日(水)から 10 月 8 日(金)まで開催され、「10 年後の東アジア経済連携・統合と日 ASEAN 関係のあり方」をメイン・テーマに ASEAN 側から 71 名、経済同友会から 54 名の経営者が集い、議論が行われた。

開会式に続き、3 つのテーマ「東アジア経済連携・統合のあるべき姿」、「日 ASEAN 間の連携強化と日本 ASEAN 経済連携協定の深化」、「アジア発イノベーションの促進」についてセッションが行われた。

開会式

萩原敏孝 第 36 回 AJBM 議長開会挨拶(経済同友会 副代表幹事・アジア委員会委員長)

2008 年の世界経済危機を経験しつつも、ASEAN 諸国は相対的に高い成長を続けている。グローバル経済の軸足が新興国に移りつつあるなかで、ASEAN の存在感は高まっている。本年の日本・ASEAN 経営者会議では日本 ASEAN 間の経済関係の強化はもとより、東アジア地域の経済連携・統合に資する日本 ASEAN 協力のあり方、持続可能な経済発展を促す域内発のイノベーションについても考えていく契機となればよいと考えている。

桜井正光 経済同友会代表幹事挨拶

3 年前の AJBM の開催以降、2007 年後半のサブプライムローン問題、2008 年後半の世界経済の大幅な後退など多くの変化が起こっている。しかし、アジア経済は 2009 年第 1 四半期には、欧米諸国を上回る回復力を示した。これは各国の積極的な内需支援策と社会資本整備によるものである。アジアでは中間所得層の拡大により、今後の経済成長を支える基盤ができた。欧米の消費が減退するなか、ASEAN 各国を中心とするアジア諸国の需要の拡大により、日本と ASEAN の関係は信頼と統合を深化させる新しいフェーズに入っているといえる。

モー・ジョー 第 36 回日本・ASEAN 経営者会議共同議長挨拶

(ミャンマー代表、ミャンマー・マーケティング・リサーチ&デベロップメント マネージング・ディレクター)

AJBM には 4 度目の参加になるが、今までは景気後退もあり、暗い話題が多かった。今年は新規に市場を開拓する必要が生じており、東南アジアには大きな可能性が生まれている。来年 37 回の AJBM の開催国となるミャンマーでは、今年選挙が開催されるとともに、法に基づいた経済への転換を含め、東アジアと他のアジア諸国との架け橋として地域の経済発展に貢献し、また恩恵を受けたいと考えている。

総理挨拶代読 菊田真紀子 外務政務官

AJBM の 36 回目の開催をお喜び申し上げます。わが国と ASEAN は長い友好関係を有しており、

日本はこの関係を引き続き育んでいく所存である。ASEAN 諸国は、経済統合を進め、インフラ整備や労働力の育成について支援を望んでおり、日本はその技術とノウハウを活用して支援していく考えである。また、2020 年の経済統合は非常に重要なテーマであり、日本はそのための取り組みを促進していく所存である。

基調講演：池田元久 経済産業副大臣

世界経済は徐々に回復しているが、予断を許さない状況にある。ASEAN 諸国を含むアジア諸国は存在感を増しており、東アジアについても今後の世界経済の成長をけん引していくものと思われる。また、日本は、経済連携とアジア地域でのインフラ開発を主軸に、隣国となる ASEAN 諸国と成長をともにしていく必要がある。

来賓挨拶：フラ・ミン 東京 ASEAN 委員会議長・駐日ミャンマー大使

過去 36 年間、AJBM は日本と ASEAN の国と企業間の協調を推進しており、その重要性を示している。ASEAN の東アジアのハブとしての位置づけと、2015 年の ASEAN 経済コミュニティ形成に向けて、日本と ASEAN は経済のみならず文化面でもお互い高めあっていく必要がある。ミャンマーは近年、経済面で門戸を開いている。来年 AJBM を開催することを心待ちにしている。

第1セッション：「東アジア経済連携・統合のあるべき姿」

議長：

シャザリ・スレイマン (KPMG パートナー、ブルネイ)

パネリスト：

アンワル・プルカダン (トリピンド・パトリア社長、インドネシア)

過去十年の間、地震、津波などの自然災害、数々のテロ事件、ビジネス面では世界的な景気後退など予期せぬ事が起こり、私たちは考え方をえざるをえなくなった。一方、プラス面では情報通信技術、医療・化学、バイオテクノロジー分野の技術が進歩した。東アジアで最も顕著な出来事といえば、世界的な経済大国としての中国の台頭である。中国は、今年日本の GDP を上回り、世界各国の投資や貿易にとって魅力的な巨大市場となっている。同地域では、ほかにもベトナム、マレーシア、フィリピン、インドネシアなど ASEAN 加盟国を含む国々も過去 10 年で GDP が 4 倍から 5 倍に拡大するという著しい成長を見せている。

来る 10 年は、次の出来事が予想される。(1) 予測できない大きな災難の発生の脅威が存在する。(2) 中国の重要性は引き続き拡大し、東アジアにおいて経済発展のモデルケースとなり、またその推進力となる。(3) FTA 締結により、貿易による価値が公平に分割されるようになる。(4) ASEAN 加盟各国は、日本が各国企業との合弁企業を通じて必要な技術指導を行うことで、広大な土地・海洋・人的資源を活用し、地域の食料供給を行う。(5) 国際事業会社によって開発された鉱物・エネルギー資源を各国内で加工・活用する。(6) ASEAN 各国で土壌・大気・水の状態が改善され、2020 年までにより良い生活環境が構築される。(7) 汚職やテロ行為は完全には無くなるものの減少し、グッドガバナンスが広がる。(8) 数多くの起業家が各国の経済を主導し、価値の創出に貢献し、国全体にとって本当の繁栄を獲得する。このヴィジョンを実現するには、東アジアの各国政府および企業が協力し、雇用を創出し、若者に訓練と教育を提供し、合弁企業を作り、

インフラを整備し、環境に配慮した農作地や養魚場を開拓し、有益なものに関わるサービスを提供する必要がある。

門脇英晴（日本総合研究所 特別顧問）

世界経済は先進国主導経済から新興国主導の歴史的変換期に入っており、東アジアはその転換の中心となっている。域内各国の経済基盤の強化、域内貿易比率の上昇により、東アジア経済は自立型成長を展望できる基盤ができた。ASEAN + 1のEPA/FTAの整備や、ASEAN6の無関税化の促進、TPPの成立に向けた交渉など、経済協力を目的とした数々の取り組みによって東アジアでの国際貿易も増加している。これにより、地域統合の枠組みもASEAN + 3、+6、+ 8、TPP、APECと拡大、東アジア概念も拡大している。

東アジアは域内各国の経済状況や人口、文化に大きな違いがあるうえ、ソプリリスク、北東アジアの安全問題など、統合には大きなハードルがある。また、域内各国の少子高齢化のスピードは想像以上に速く、生産年齢人口の減少に伴い、その段階での一人当りGDPが先進国並みに達していないことが最大のリスクとなっている。東アジア諸国は、エネルギー・資源、環境、食糧・農業ならびにセーフティネットという最優先の課題に取り組むため、「開かれた安定」という東アジア経済連携・統合のキーワードのもと世界経済成長の推進力として戦略的に協力しあう必要がある。

リタ・キング（パタフライ ディレクター、シンガポール）

2009年1月時点で、東アジア域内で37件のFTAが締結されており、72件のFTAが協議中となっている。このFTAが貿易を後押しし、対外直接投資(FDI)が活性化し、生産ネットワークを深め、経済統合を進めている。近年FTAが拡大したのはWTOドーハ・ラウンドでの進展の遅さによるものであり、また市場主導の経済統合が進化したことや、NAFTAが相対的に成功したこと、アジア通貨危機で圧力がうまれたことに影響を受けている。

様々なFTAが域内で広がりを見せているが、それぞれの様式が異なりわかりにくい。スパゲッティボウル現象（FTAごとに同一の商品に異なる関税や原産地規則が適用されるなど）や、各FTAの適用および登録に要する費用の問題、FTAによってもたらされるはずの好影響に関する情報や理解が不足しているなど、その利用率を上げるにはさらなる課題が見えてきている。これらすべてが、中小企業を中心にFTAの恩恵を受けることの阻害要因となっており、地域の貿易や経済発展を制限している。

市場へのアクセス拡大、生産費用の削減、ビジネスチャンスの拡大、FDIの増加などのビジネスチャンスに対する理解を深め、中小企業を中心に地域全体で今以上に訓練、ケーススタディ、アドバイス、情報、手続きの自動化、技術サポートが必要となっている。

グエン・ヴェト・クオン（サイゴン・インベスト・グループ駐日代表部代表、ベトナム）

アジアが世界的な経済後退から回復するなか、近年では初めてアジアが世界における成長と繁栄の推進力と見られるようになってきている。グローバリゼーションの拡大や、それに伴う競争の激化で、ドーハ・ラウンドでの進展の遅さにより、東アジア経済は単一の地域FTAで統合する必要性が高まっている。二国間FTAが拡大しているなか、それぞれ異なる原産地規則などが多国間貿易をより複雑なものにしている。

地域全体の FTA を締結することで、国により異なる規則、税制、関税などの問題を解決して、食料やエネルギー保全に関する地域政策の確立および持続可能な成長を進めることで、域内の国々、企業の競争力を強化できると考えている。この統合の理想は物品、サービス、資本、労働の自由な行き来を求めているが、物品とサービスの自由な移動に関して言えば 2020 年までには確保できると考えられる。資本と労働に関してはその後の課題となると思う。

コメント

- FTA の適用だけでは十分とはいえない。さらに重要なのは事業に適用される税率である。
- スパゲッティボウル現象の指摘があったが、ASEAN は多様な二国間 FTA を統合し、簡素化する必要がある。

昼食会

ゲスト・スピーカー：

モンテ・カセム（立命館大学 副総長、立命館アジア太平洋大学 前学長）

ASEAN では科学的な知識が蓄積されており、科学コミュニティの基礎はあり、地域間でアイデアは制限なく流れているものの、まだ課題は山積している。経済成長によって新しい問題が発生しているという現実を受け、アジアの科学分野は、アイデアを商業ソリューションにつなげる必要がある。

日本の科学分野は、以前からデバイスの開発や知識の蓄積に強みを発揮していたが、これらのデバイスを商業利用が可能なシステムに変換することや、知識を知恵に変換することは苦手であった。日本の科学分野は、差し迫った社会問題を解決する可能性をもつ開発をたくさん生み出しているにもかかわらず、日本政府は事業仕分けを通じて、予算を削減している。

成果を発表する場となる雑誌を創刊し、情報通信技術をはぐくむこと、他国の学位を認め、ビザの要件など国家間の障壁を緩和して専門家の移動を容易にすること、国際的な問題への対処の好例となる地域イニシアチブを創出することで、アジアの科学分野の発展を促すことができる。

第2セッション：“テーマ：「日 ASEAN 間の連携強化と日本 ASEAN 経済連携協定の深化」”

議長：

プー・サエ・トン（アンコ・ブラザーズ 社長兼 CEO、カンボジア）

パネリスト：

山口千秋（アジア委員会副委員長、トヨタ自動車 常勤監査役）

ASEAN はグローバル生産拠点として成長を遂げ、市場としても注目を集めている。しかし、今後 10 年を見据えると、ものづくり拠点としては厳しい国際競争にさらされることになるので、日 ASEAN 間でイコールパートナーシップを築き WIN-WIN 関係を構築していくことが重要となっている。

経済金融危機ののち、ASEAN 市場は一時的な落ち込みはあったものの、その後急速に回復し、高成長を維持している。トヨタの ASEAN 市場での販売台数もグループ全体として、2010 年では大きく回復する見込みである。グローバル調達への推進や R&D の現地化を実施し、ASEAN 発の「良質廉価」な商品を提供することで今後の成長が可能となっている。ASEAN が世界経済のハブとして、さらに発展することを確信している。

トーマス・アキノ (リサーチ・コミュニケーション・センター シニア・フェロー、フィリピン)

過去 5 年間、2009 年以外の年では日本と ASEAN 各国との貿易量は増加している。これは物品・サービス貿易、原産地規則、食品安全又は動植物の健康に関する措置・施策や適合性評価手続き、投資、経済協力、紛争解決手続きなどを設定する、日 ASEAN 包括的経済連携(AJCEP) 協定に関する協議およびその締結の影響も少なからず受けていることが考えられる。2008 年 4 月の AJCEP の締結以降、ASEAN 加盟 10 カ国が協定に加わっている。このような協定締結は ASEAN にとって 2 度目の試みであり、2 国間経済緊密化連携協定(CEP)を補完するための地域 CEP および FTA も含まれる。AJCEP によって、関税の引き下げまたは撤廃、優遇措置を認める原産地規則の設置による地域経済および貿易の自由化、わかりやすい基準、明確な紛争解決の仕組みの提供による貿易の促進、そして発展推進機関の設置および事業計画の策定による更なる経済協力が求められている。

さらにまだ取り組むべきことはある。特にサービス貿易や投資に関する協議と日本 ASEAN 諸国間での協議中の他の貿易協定との調整、エネルギー安全保障や環境保全に関する政策協調、情報通信技術、自動車、バイオテクノロジー、観光、インフラなどの高い潜在性を有する産業部門および知的財産、農林水産の事業計画で協調し、実施機関や企業が原産地規則や OCP(運用上の証明手続き)の理解を進め、物品の関税表および分類を改定することなどが特に必要となっている。今後、政府は、サービス部門を中心に貿易および投資の拡大を推進し、事業家や熟練した専門家の移動を促さなければならない。

イグナチウス・ホワン(ブライアン・ケーヴ・LLP パートナー、シンガポール)

公共インフラ事業において官民パートナーシップ(PPP)を活用することで、民間部門がインフラを保有することになり、民間の出資が増える反面政府の出資が減ることになる。このシフトによって ASEAN 各国において同様の案件に PPP の適用が増加することが期待されている。この新しい PPP によって政府が民間企業のイノベーション、専門技術、効率性の分野に関与しながらも負担を減らすことが可能になっている。

また、官民の間で最適な包括的ライフサイクル・コストリング(WLCC)を適用し、最適ナリスク配分が行われ、民間においてより多くのビジネスチャンスを生み出し、現地法、金融、技術の分野の専門技術をはぐくむことが可能である。ASEAN 各国における自由化と域内で締結している FTA および CEP により、国有化、為替レート、利益の本国送還、紛争解決、法規制の改定などといった主要な PPP 出資リスクを削減することになる。PPP の成功は概して、強い政治的な意思、協力的な投資制度、公平で透明性の高い調達手段、現地の債券市場の健全性と流動性に依存する。

ブンルアサック・プッサルングスリ(CIMB タイ・バンク調査部 社長、タイ)

ここ数年、世界的に環境は大きく変化し、これによって日本および ASEAN 諸国の将来を形作ることになる。米ドルの価値が下落したことで各家庭の貯蓄が増加し、米国の経常赤字が減少し、そ

れによって世界の財政バランスは大幅に調整された。これにより、米国の輸入国としての立場は弱まり、需要の中心は東に移ると見られている。グローバルイゼーションは近年拡大しており、国家間の物品、サービス、資本、労働の流れに対する制約が緩和されていることや二国間および地域 FTA が拡大したことで「ワンワールド・ワンマーケット」の概念が生じている。

これらすべての変化によって ASEAN 各国と日本は、欧米諸国からの需要が減退し、東アジア各国において経済的文化的つながりが拡大し、中国における生産コストが増加したことに伴い、生産拠点を中国から ASEAN 各国に移転する可能性を示唆している。域内での経済統合が続く中、主要な貿易相手国を、既存の協定でのこ入れや拡大で、より包括的な協定に包含するため ASEAN+6 や、またより容易だと思われる ASEAN+3 の形成、あるいは ASEAN 全域での多国間サプライチェーンの強化に向けた取り組みが次のステップとなる。

コメント

- PPP のパネルでは PPP を行っているのは、シンガポールのみであるといっていたが、シンガポールは格付会社から高い格付を得ている一方、他の ASEAN 諸国の格付けは低い。他の国で PPP 投資を行う場合、リスクは高くなり、それでは日本の銀行の融資は得られない。
- 日本の銀行は日本と ASEAN の関係深化に重要な役割を担っているが、PPP 案件へ出資するためには通常、役員クラスの企業トップの決断が必要になる。
- 日本の金融機関がリスクをとりたがらないというのは確かだが、最近では徐々に変わりつつある。
- 政府は、経済協力を拡大するために肝要となる知的財産権の強化に重要な役割を担っている。

第3セッション：「アジア発イノベーションの促進」

議長：

モー・ジョー（ミャンマー・マーケティング・リサーチ&デベロップメント マネージング・ディレクター、ミャンマー）

パネリスト：

クスモ・マルトレジョ（キャツル・ヤサ会長、インドネシア）

これまでイノベーションの中心は日本だったが、今後のイノベーションはアジアが中心になる。世界人口の 55%を抱えるアジアは、収益性の高い、革新的な物品・サービスの市場としてのみではなく、イノベーションの創造、拡大、発展性のある地域だと捉える必要がある。しかしながら、アジア、特に新興国のイノベーションには、教育レベル、ビジネス環境、情報・社会インフラの 3 つの問題がある。

イノベーションを推進するには、新しい経済・社会的なアイデア、知識、技術を学び、利用し、自ら創造することを総合的に支援する総合的な政策の枠組みを作るための政策がなくてはならない。アジアにおいては国々の開発の度合いや文化などは大きく異なり、イノベーションを促進するために政策や規制面で特化した戦略が必要になる。ただ、開発度合いや文化があまり変わらない国々では共通の政策が適用できる。今日までのアジア経済の飛躍的な成長を受け、アジアが 21 世紀のイノベーションの中心となることは遠くない。

菅田史朗（アジア委員会副委員長、ウシオ電機 社長）

従来、近代産業において、イノベーションは主に欧米や日本など先進諸国から生まれて、日本やアジア諸国はそれらを生産することによって経済成長を図って来た。しかしこれからはアジア発のイノベーションを用いて、今後アジア市場の主流になってくる中間所得層及びそれ以下のボリュームゾーンのニーズを満たすためには、所得水準に応じた低価格の製品が求められる。アジアは「世界の工場」と同時に「世界の市場」として認識され始めている。

ただ、生産拠点数とR & D拠点数の割合を見ると、欧米と比較してアジアは三分の一以下である。日本企業はこれまで生産拠点をアジアに積極的に展開しているが、研究開発拠点の多くは日本国内や欧米等に配置してきた。しかしこれからは、消費市場としてのアジアに直結した製品開発を行うため、研究開発機能をアジア地域に展開しなければならない。

ウデト・ソバナボン（ラオス商工会議所副会頭、ラオス）

アジア各国のビジネスコミュニティは世界市場での競争の激化に対応するため、最新の生産、経営、マーケティング技術を取り入れ、新しい需要やバリューチェーンに応えられるビジネスモデルを取り入れるよう、イノベーションを迫られた。世界市場競争の過熱により、イノベーションとブランディングは切っても切り離せない存在となっている。ブランド製品は、常にイノベーションが必要で、ブランドを開発する企業は製品開発や人材育成に多大な投資を行っている。

ASEAN 各国の現地企業は、イノベーションにかかる費用の高さと変化の難しさから、イノベーションへの関心が低くなっている。また、多くの ASEAN 諸国では、教育制度やインフラが整っておらず、製品開発のネットワークも限定的なものとなっている。ASEAN 各国は FDI を通して人材を育成して、インフラを整備し、知識を基盤にする経済を日本および韓国から取り入れ、知識を基盤とするコンセプトをはぐくむ必要がある。

コメント

- イノベーションは機能、スキル、テクノロジーの三つの側面から捉える必要がある。
- 革新的な企業として Google や Apple を選ばれる方が多かったが、この 2 社は消費者によって価値を見出されるシステムを作ることで成功を収めることができた。
- アジア発のイノベーションは、この 2 社とは異なるものになると思われる。今後どのようなイノベーションに取り組むべきか、模索し、そのイノベーションによってどのような価値が生じるのか考える必要がある。

閉会式

桜井正光 経済同友会代表幹事挨拶

現在、ASEAN を中心に、東アジアでは自由貿易網が拡充し、経済的相互依存が進んでいる。東アジアは世界経済の成長センターとしての役割を大いに期待されており、これは大きな機会であると同時に、一層の日 ASEAN 間の連携強化に向けて我々経営者が負った責任も大きいということになる。

いわゆる「アジアの世紀」は無条件で実現するわけではなく、様々なリスク要因に対処するための能力を培う必要がある。幸いにして、日本とASEANの間には、長年の関係に基づく信頼とネットワークが築かれており、そうした資産を活用して、アジアの社会に安定と繁栄をもたらすための基盤作りを進めていく必要がある。日本・ASEAN 経営者会議が、我々経営者自身の知的創造力、構想力と情報発信力を養い、具体的な行動につなげるための場として機能していくよう、努力を重ねていく必要がある。

モー・ジョー 第36回日本・ASEAN 経営者会議共同議長挨拶

(ミャンマー代表、ミャンマー・マーケティング・リサーチ&デベロップメント マネージング・ディレクター)

来年のAJBMはミャンマーでの開催となる。今やミャンマーは国際社会に対して国を開くという歴史的な転換期を迎えており、そうした中、一人でも多くの皆様の参加をお待ちしたい。ミャンマーは、南アジア、中東へのゲートウェイとして、戦略的に重要な位置を占めている国でもある。世界からの積極的な投資を今後、大いに期待したい。

萩原敏孝 第36回AJBM 議長開会挨拶(経済同友会 副代表幹事・アジア委員会委員長)

日ASEAN関係の将来を見据えた議論をこの度の会議では行ったが、連携強化に向けて、物品のみならず、サービスや人材の移動をさらに推し進め、ビジネス活動のみならず、人間の安全保障などの分野においても協力関係を構築することで、より重層的な関係の実現を目指す必要がある。

東アジアの将来には大きなチャンスがあるのと同時に、対処すべき課題も存在する。その点において、日本とASEANが戦略的に連携し、具体的な成果をあげていかななくてはならない。日本・ASEAN 経営者会議も、激しく変動する国際情勢に応じた成長を遂げ、時代の要請に応えることのできる会議体として成長する必要がある。

推進委員会

- 推進委員会として共同声明案を採択することを確認。
- 第37回日本・ASEAN 経営者会議は2011年にミャンマーにて開催する。
- 第37回日本・ASEAN 経営者会議 準備会合は2011年にインドネシアが主催する。
- 第38回日本・ASEAN 経営者会議は2012年にマレーシアが主催する。

第 36 回 日本・ASEAN 経営者会議 共同声明 (日本語版)

第 36 回日本・ASEAN 経営者会議 (AJBM) は、2010 年 10 月 6 日～8 日の日程で東京において開催され、日本と ASEAN 諸国が、アジア太平洋地域の経済連携のハブとしての重要な役割を果たしていくことを強調する共同声明を採択した。日本と ASEAN 諸国を軸とする、より開かれた、自由な市場をアジア太平洋地域に実現し、地域の全ての人々が豊かさを実感できるよう、我々の関係をより一層強化・発展すべきである。官民を問わず、日本と ASEAN 諸国の関係者が具体的な行動を起こすことを求めたい。

- 2004 年の我々の共同声明は日本・ASEAN 包括的経済連携協定 (AJCEP) の早期締結を求めたが、AJCEP は 2009 年に締結された。その間、2008 年の世界経済金融危機を経験しつつも、成長著しい中国、インドと相まってアジア地域は世界の成長センターとして、また世界の市場として、潜在的リスクを抱えながらも、世界経済を牽引する役割を期待されている。
- 中長期的な視野に立てば、東アジアにおいて ASEAN 諸国が核となって、築き上げた FTA 網の戦略的活用が、日本と ASEAN 諸国にとってはますます重要になってくる。他方、ASEAN 諸国は国際経済におけるプレゼンスを高める一方で、世界の生産拠点としての地位をめぐり、厳しい国際競争にさらされる可能性もある。また、環境問題、経済格差、経済・制度インフラの不備等、経済成長の制約要因への対処が必要となることも想定されるため、日本と ASEAN 諸国は、多様で重層的な協力関係を築く必要がある。
- 今やアジア太平洋地域においては、AJCEP をはじめ、豪州と NZ の経済緊密化条約 (CER)、中国、インド、韓国、米国、そして欧州連合が関わる二国間・多国間の経済連携・統合の動きが加速化している。また、環太平洋パートナーシップ (TPP) といった新たな提案もなされている。AJCEP を真に包括的、かつ実効性ある協定へと強化させなければ、日本 ASEAN 経済関係は相互利益を十分に享受することはできない。そして競争が激化すれば、日本 ASEAN 経済関係は相対的に弱体化しかねない。
- 従って、日本と ASEAN 諸国は、これまで実質的な進展を見ることがなかった投資、サービス貿易等の自由化に対する交渉を、再検討し前進させなければならない。特に日本は、ASEAN 諸国からの期待と要望に真摯に耳を傾け、以前から考慮されている農業産品の市場開放や労働力の自由移動を最優先事項とし、積極的に対応すべきである。日本政府は国内の一部の利益を優先するあまりに、日本の国益を損なうような政策を採るべきではなく、未来志向に立った政治のリーダーシップにより、日本の市場開放政策を強力に推進すべきである。
- 計画通りに 2015 年に ASEAN 経済共同体は実現されるであろう。この ASEAN 経済共同体の実現によって原産地規則の適用、通関審査などの手続き面、知的財産の保護といった公正競争にふさわしい制度的基盤など、貿易手続きにおいて、より整合性があり、実効性のある EPA/FTA の地域マネージメント・システムの確立が見込まれる。

アジア太平洋地域の経済連携・統合のあり方や、達成への道筋については、現在、

様々な枠組みが提起されており、日本と ASEAN 諸国は、長期間にわたって培ってきた相互への信頼関係に基づき、日本 ASEAN 経済関係をより高次なものへと発展させるべきである。物品、資金・資本、人材、情報が協力的で、相互に、自由に行き交う体制を築くために、日本と ASEAN 諸国は AJCEP の深化に協力すべきである。これにより AJCEP がアジア太平洋地域の重層的な経済連携ネットワークのハブとして現実的に機能することができる。ただし、それには適切な政府の検証と施策によるサポートが不可欠である。

- 日本及び ASEAN 諸国の今後の経済成長は多国間または地球規模の協力による緩和が必要な地球温暖化、疾病、自然災害といった、課題によって影響される。日本と ASEAN 諸国は、貿易や投資の自由化推進に不可欠なインフラ整備に加えて、こうした経済的・社会的発展の制約要因の軽減という面にまで連携を拡大すべきである。特に日本の環境技術、自然災害対策、水・食料の安全確保に関わるノウハウ等を習得することが重要である。人間の安全保障確保について、日本と ASEAN 諸国が具体的な成果を挙げ、その試みを世界へと広げていくことで、人々の生活に安定と安心をもたらし、一層の世界経済の繁栄に寄与することが可能となる。

- 経済活動の最前線に立つ我々経営者の日々の活動こそが、各国そしてアジア地域全体における国民の豊かさと生活の安定に直結していることを強く自覚し、我々は経営者として公的機関・地域とのパートナーシップをより一層強化していきたい。

以上